

『おくのほそ道』の世界

— 韓国における芭蕉像の現在をふくめて

金 貞禮

全南大学校・人文大学
日語日文学科副教授

一

芭蕉を中心に日本の仏教について話してください。ある日、韓国の仏教放送局からこのような依頼をうけた。また、ある山奥の寺へ行って売店によつたら、拙訳の韓国語の『おくのほそ道』が置いてあった。これはまたどうしてだろうと、周りの人々に聞くと、『おくのほそ道』の韓国語訳を読んだ人の多くは、芭蕉が出家した僧侶だと思ひ込んでいるのには驚いた。特に芭蕉について詳しくは知らないまま、この紀行文の本文だけを読んだ人の場合は、特にそうであった。そういう人々の芭蕉像を一語でいえば、「あてどもなく漂白の旅に出、ところどころで悲哀に満ちた旅の思いを詩によむ修行僧」とでもいえようか。そして、この自由でありながらもどこか悲哀に満ちた旅人芭蕉への共感と憧れの念は、考えた以上に強かった。いわば、韓国の一般読者における芭蕉のライフ・スタイルと文芸世界の普遍性とでもいえるものが、実はこのようにいささかの誤解の上に成り立っていたのである。

芭蕉が、『おくのほそ道』の中で宗教的なことについてあまり語っていないことは、周知の通りである。また、滑稽を旨とする俳諧という文芸は、一見悲哀に満ちているかのように見えても、実は笑いを漂わせている場合が多い。井本農一氏は、『おくのほそ道』に描かれている旅は、「風流に遊ぶ、呑気な、心安らかな旅である」という。しかし、韓国語訳の『おくのほそ道』の世界は、悲哀に満ちた懐旧の旅ばかりが浮き彫りにされてしまい、井本氏のいうようには読まれていないようである。

国と時代、ことばと境涯を超えて人間に共感できることは、涙と悲しみ、またそれを醸し出す物語であろう。それに比べて笑いは、同じ文化や知識を基盤にしておかないと、伝わりにくい。しかし、このようなことを承知の上でも、この紀行文の地の文の合間や俳句に込められているユーモア、そして旅の楽しさは、それほどまでに伝わりにくいものであろうか。これは、ただ翻訳による問題、あるいは俳句や芭蕉についての知識の乏しさだけによるものではなく、実はこの紀行文が本来にもっている問題とかわるものではないだろうか。

本稿では、このような点を念頭において、芭蕉の描いている旅人像を中心に『おくのほそ道』の世界について考えてみたい。そして、最近俳句や芭蕉についての関心が高まりつつある韓国における芭蕉像の現在を紹介することで、この紀行文の普遍性と特質の一面が垣間見られたらと思う。

二

江戸の門人に見送られ、「前途三千里」の遙かな道のりに旅立った芭蕉は、この旅の第一日目の夜の思いを次のように述べている。

耳にふれていまだに見ぬさかひ、若生ももしきて帰らばと、定さだめなき頼たのの末をかけ、其日漸やうやう草加と云宿にたどり着にけり。瘦骨そうこつの肩にかゝれる物先まづくるしむ。只身ただみすがらにと出立侍るを、帔子かみこい一衣は夜の防ぎ、ゆかた・雨具・墨・筆のたぐひ、あるはさがりがたき饑うなどしたるは、さすがに打捨うちすがたくて、路次おぢりの煩わづらとなれるこそわりなけれ。

草加さかに「たどり着」いた芭蕉は、「瘦骨そうこつの肩にかゝれる物先まづくるしむ」と、真まつ先に荷物に苦しむ「瘦骨」のつらさを吐露している。そして、この旅の三十三日目にあたる五月二日の夜、雨の漏る貧しい飯坂の宿で、蚤や蛾に悩まされた末に持病までおこつてつらい一夜を過ごしたあとは、次のように述べている。

遥あなる行末をか、えて、斯かる病覚おぼ束つかなしといへど、羈かり旅よ辺土へんの行脚あんぎゃ、捨身しんじ無常むじやうの観念、道路にしなんこれ是天の命めいなりと、氣力聊いささとり直し、路縦横じゆうわうに踏ふで伊達だての大木戸おほきどをこす。

これは、この紀行文の序文で、「古人も多く旅に死せるあり」と、旅の中で死んでいった先行詩人を慕う心とよく呼応しているが、「風流に遊ぶ」詩人の旅行にはあまりにも悲壯である。まるで死を覚悟し修行の旅に出た行脚僧の独白そのもののように聞こえる。

では、芭蕉は旅の中での自分自身をどのように認識しているであろうか。まず、旅立って四日目の三月三十日の夜、日光で親切に宿を貸してくれた仏五左衛門の人柄に感心して、「かゝる桑門の乞食巡礼ごときの人をたすけ給ふにや」といっているが、これを見ると、芭蕉はこの旅における自分を、「桑門の

乞食巡礼ごときの人」、すなわち行脚僧のようなものだという自己認識をしていることがわかる。また一方では、この旅で出会った見知らぬ人の口をかりて、自分の様子を語らせている。それには、まず市振の遊女のことばがある。伊勢参りに立ったものの行く道を知らない不安を隠せない遊女たちは、芭蕉一行の後についていくことを頼んで、「衣の上の御情に、大慈のめぐみをたれて、結縁せさせ給へ」と涙ながらにいう。「衣の上の御情」、いわば「僧としての御情で」と頼んでいるのである。これに答えて芭蕉は、「我くは所々にてとゞまる方おほし。只人の行にまかせて行べし。神明の加護かならず恙なかるべし」と、彼女たちに見られた「衣の上」をそのまま受けるような言い方で、「神明の加護」云々と語っている。芭蕉はここで、自分たちは法体であるがために、もつとも縁の遠いはずの遊女たちからこのような依頼まで受けてしまったのだといっているようにも見える。

芭蕉一行の旅姿については、この旅に同行している曾良を紹介する日光の部分に次のように出ているが、それを見てみよう。

剃捨そりすてて黒髮山こくもがへに衣更ころもがへ

曾良

曾良は河合氏かはかわぢにして惣五郎そうごろうと云へり。芭蕉の下葉したばに軒のきをならべて、予が薪水しんすいの勞あそびをたすく。このたび松し
ま、象潟さげがたの眺共なみどもにせん事を悦よろこび、且は羈旅かりよの難がたをいたはらんと、旅立暁たびだつあけ、髪かみを剃そりて墨染すみぞめにさまをかえ、惣五
を改あらためて宗悟そうごとす。仍なほて黒髮山こくもがへの句有あり。衣更ころもがへの二字力にじごありてきこゆ。

芭蕉は、旅立つ早朝、曾良が「髪を剃て墨染にさまをかえ、惣五を改て宗悟」としたのだといっている。旅立つにあたっての曾良の法体への変身と改名というこのエピソードは、この旅にのぞむ曾良の心構えを

うかがわせる。このような曾良の心構えは、芭蕉の心構えにも通じるものであろう。『曾良随行日記』によれば、この旅の途中の四月十九日、曾良は那須湯本で托鉢にも出ている。

この紀行文には、芭蕉自ら自分の服装などについて語ってはいないが、芭蕉の姿も曾良と同じく法体であった。芭蕉は遊女の口を通じて、法体の自分たちが、僧と見られていることを述べながら、彼女たちにもそういわれてもあえて否定もしていない。このようなことは、福井の等栽を訪ねた時、留守の等栽にかわつて芭蕉一行を迎えたその妻の場合も同じである。彼女もまた、「いづくよりわたり給ふ道心の御坊にや」と、芭蕉一行を僧侶として受け止めているのである。

では、みずからは行脚僧、旅の途中で出会った人々からは僧と認識されているこの旅の主人公芭蕉は、この旅の中でどのようなポーズをとっているであろうか。まず、旅程を見ると、寺と神社訪問に集中しているかのようにみえる。神社の場合、室の八島・塩釜神社・太田神社・氣比神社など、紀行文の中で書いているところだけでも九カ所である。そして、この神社のすべてに、「詣」・「拝」・「参」ということばをそれぞれつかっている。また、寺は、光明寺・瑞岩寺・立石寺・永平寺など、参拝していると書いている寺が四カ所であるが、これらの寺には「拝」・「詣」・「礼」などのことばを使っている。それに、用事でよつたりしている寺をあわせると、十カ所におよぶ。また、立石寺と羽黒山の南谷別院、全昌寺では、泊まっている。『曾良随行日記』によると、神社や寺への訪問は実際の旅程ではこれよりはるかに多かった。

『おくのほそ道』にこれほどまでに寺や神社が出てくるのは、もともと日本の紀行文というのが、歌枕・名所・旧跡を訪ねるのがひとつの目的で、寺や神社は多くそれにかかわっているからでもある。芭蕉はまた、西行をはじめ雲居禅師、仏頂和尚などの跡を慕い歩いているが、これも同じく伝統的なもの

のの見方、書き方とつながっているであろう。そうかといえ、これほどまでに丹念に寺や神社を訪ねていながらも、僧や神官についての詳しい言及は紀行文の中ではほとんどとされていらない。ただ須賀川で会った可伸の庵とその暮らしぶりについては次のように述べている。

此宿しゆくの傍かたがはに大きな栗の木陰をたのみて、世をいとふ僧有あり。椽とらひろふ太山みやまもかくやと聞きに覚えられて、ものに書付かきつけ侍まじ。其詞、

栗といふ文字もんじは、西の木と書て、西方浄土さいほうじやうどに便たよりありと、行基菩薩ぎやうきぼさつの、一生、杖にも柱にも此木ここのきを用給ふとかや。

世の人の見付ぬ花や軒の栗

『曾良随行日記』によると、実際の旅では、四月二十三日の晩方、芭蕉はこの庵、すなわち可伸庵へ遊び、翌日の二十四日の午後はこの庵で歌仙を巻いている。連衆は芭蕉と曾良・等躬・可伸（俳号は栗齋）など、七人であった。しかし、芭蕉はこの隠遁僧の暮らしぶりとそれへの共感を、庵のそばにある大きな栗の木、そして可伸の俳号の一字でもある「栗」の字に思い合わせて、栗の木にまつわる行基菩薩のエピソードをもつてきて述べているだけである。この文章だけをよむと、芭蕉はこの隠遁僧とは全然知らない間柄のように見える。たまたま自分の滞在している須賀川宿駅の近くにある隠遁僧の庵を見付け、その閑寂な庵とそここの僧の暮らしぶりに共感をこめて自分の思いを述べている。この文章のどこにも可伸との詩的交流を匂わせていない。俳人可伸の姿はどこにも見えず、隠遁僧の可伸だけが、「世をいとふ僧」と匿名になって述べられているのである。

この場面での芭蕉のポーズからは、行脚僧的なものがよみとれるのではなからうか。長い道のりの途中に訪ねた地で、たまたま出会った心の通じ合う俳人、その詩的交流には触れないで、昔のしのばれるその隠遁地と隠遁ぶりについて述べているだけの芭蕉のポーズは、諸国めぐりの行脚僧に近い。しかもこの僧を匿名にすることで、いかにも自分は訪問者という趣を漂わせている。

『おくのほそ道』における芭蕉のポーズの一つには、このような行脚僧的なものがあげられよう。「桑門の乞食巡礼ごときの人」という自己認識、また服装など外面的に行脚僧の旅姿をしている芭蕉一行は、旅の所どころでこのように行脚僧のポーズをとっている。そのため、たとえことばでは一言とも宗教的なむねのことを語っていなくても、『おくのほそ道』の世界は宗教的なものがベースになっているように読まれる。それで、『おくのほそ道』を読み終わった韓国の読者は、芭蕉が修行僧だと思ひ込んでしまうのではなからうか。

三

『おくのほそ道』における芭蕉のもう一つのポーズは、悲哀に満ちた旅人である。この紀行文における悲哀感は、「野ざらしを心に風のしむ身哉」という句をよんで旅立っていく『野ざらし紀行』に見られる悲壮で緊張感に満ちているポーズともまた違う。何か根源的なものへ遡っていくものの求道的な姿勢がある。

まず、『おくのほそ道』における芭蕉を悲哀的な旅人と感じさせる直接的な理由は、「涙」であろう。芭蕉は「慟哭の詩人」という指摘もあるが、『おくのほそ道』には特にそれが目立っている。言葉の用例

からみてみると、「泪」・「なく」、またはそれに準ずる行動の用例は、九例もある。しかし、これに比べて「笑う」・「微笑む」・「うれし」の例は一つもない。「よろこび」という言葉が三例出ているが、この言葉は「なみだ」と「なく」の強烈さには、勝てない。その例をいくつか見てみよう。

①前途三千里のおもひ胸にふさがりて、まぼろし幻のちまたになみだ離別の泪をそ、く。

ゆくはる行春やとりなまづ鳥啼魚の目は泪

②是、これ庄司が旧館也。麓に大手の跡など、人の教ゆるにまかせて、なみだ泪を落し、又かたはらの古寺に一家の石碑を残す。中にも、二人の嫁がしるし、まつあはれ先哀也。女なれどもかひくしき名の世に聞えつる物かなと、たもと袂をぬらしぬ。

③さて偕も義臣すぐつて此城にこもり、功名一時の叢となる。国破れて山河あり、とてう城春にして草青みたりと、うしろしめ笠打敷て、なみだ時のうつるまで泪を落し侍りぬ。

なつくさ つばはら夏草や兵ともが夢の跡

④一笑と云ものは、此道にすける名の、ほのかく聞えて、世に知人も侍しに、こぞ去年の冬さうぜい早世したりとて、其兄追善を催すに、

わがなみだ塚も動け我泣声は秋の風

引用①は、旅立っていく芭蕉の別れの涙である。引用②は、義経の側に立って勇敢な戦いをした佐藤元治一家の旧跡を訪ねての涙である。引用③は、『おくのほそ道』でもっとも有名な場面の一つ、平泉での懐旧の涙の場面である。引用④は、金沢の俳人一笑の追善句。こう見てくると、この紀行は芭蕉の涙の旅のようである。そしてこの紀行の涙のクライマックスには、一笑の追善句「塚も動け」がある。

特にここで注目したいのは、引用②と引用③の懐旧の涙である。ここには敗れた側の跡の今を見ながら、敗れた人々とそのころを涙でしのぶ芭蕉がいる。その人々の敗れた志とか、名分、あるいはこの人たちを負けさせた反対側のことなどについては、何も述べられていない。ただ、命がけで義理をまもり勇敢に戦った武士たちについて、そして佐藤家の凜々しい嫁たちの姿について述べられているだけである。

このように各地を訪ね、そのの今に涙を落とし裾をぬらす芭蕉のポーズは、どこか異様な感じさえ与える。歴史の是非を問うことなく、ただ敗れたひとびとの悲しさとつらさ、そののむなしさについてひたすら述べられているからである。

『おくのほそ道』にはこのような悲哀なる涙とは別に、もう一種の涙がある。芭蕉が探し求めている「古人の心」を閲する悦びの類の涙である。

⑤むかしよりよみ置る歌枕、おほく語伝ふといへども、山崩、川流て、道あらたまり、石は埋て土にかくれ、木は老て若木にかはれば、時移り代変じて、其跡たしかならぬ事のみを、爰に至りて疑なき千歳の記念、今眼前に古人の心を閲す。行脚の一徳、存命の悦び、羈旅の勞をわすれて、泪も落るばかり也。

壺の碑を訪ねての芭蕉のこの感激ぶりは、この旅の目的が何であったのかをあらためて考えさせてくれる。また、同じ悦びの涙は、羽黒山の別当阿闍梨に求められて短冊に書いた「三山巡礼」の句の中にも出てくる。

⑥ 語られぬ湯殿にぬらす袂かな

湯殿山 銭ふむ道の泪かな

曾良

芭蕉と曾良のこの句は、湯殿神社に参拝してうけた感動を表現している。このような悦び、または感動の涙は、旅人芭蕉の悲哀のポーズが強かっただけに、「羈旅の勞」と「行脚の一徳」に報われて涙する旅人の姿に真実感と充満感を与える。そして、主人公芭蕉のながしている悲哀と悦びの涙の交響は、未知の異郷、古戦地などが主な背景になっているこの紀行文における旅人像を、現実感に富む鮮明なものとして浮き彫りにさせてくれるのである。

四

日本の文学的伝統、また俳諧という文芸ジャンルの特質について詳しく知らないで、『おくのほそ道』を読んだ場合、もっとも目立つのは、今まで見てきたように涙する主人公、つまり行脚僧の姿で行脚僧のポーズをとりながら門人たちとの別れに涙を落とし、敗れた先人の跡と早世した知人を弔いながら歩いている旅人芭蕉であろう。そのため、この紀行文における芭蕉の姿は、宗教的で悲哀に満ちた旅人像として

成り立つ。そして、この旅人像に共感する韓国の多くの読者は、この紀行文の普遍性のあり所を考えさせてくれる。

しかし、芭蕉は滑稽を旨とする俳諧師である。そしてこの紀行文の大きな目的の一つは、各地の俳人たちの交流でもあった。芭蕉は、この旅で未知の異郷を訪ね、未知の人々にも出会っているが、実は、旅先のところどころの門人を訪ねたり、あるいは紹介状をもって世話になっている。そして、その地の連衆との俳席にのぞみ、歌仙をまいたりしている。

『笈の小文』には、旅についての芭蕉の考えが次のように述べられている。

山野海濱の美景に造化の巧を見、あるは無依の道者の跡をしたひ、風情の人の実をうかがふ。猶栖をさりて器物のねがひなし。空手なれば途中の愁もなし。寛歩駕にかへ晚食肉よりも甘し。とまるべき道にかぎりなく、立つべき朝に時なし。只一日のねがひ二つのみ。こよひ能宿からん、草鞋のわが足によるしきを求め、と計はいさ、かのおもひなり。時々気を転じ、日々に情をあらたむ。もしわづかに風雅ある人に出合たる、悦びかぎりなし。日比は古めかしく、かたくな、りと悪み捨たる程の人も、邊土の道づれにかたりあひ、はにふ・むぐらのうちにて見出したるなど、瓦石のうちに玉を拾ひ、泥中に金を得たる心地して、物にも書付、人にもかたらんとおもふぞ、又是旅のひとつなりかし。

〔笈の小文〕

『おくのほそ道』よりも前に書かれた『笈の小文』に、芭蕉はこのように具体的に旅の本質について書き、旅する中でもっともうれしいことは「風雅ある人」との出会いだと述べている。『おくのほそ道』の旅中、芭蕉は多くの「風雅ある人」に出会っている。紀行文の中で名前をあげているだけでも、黒羽

の図書高勝、須賀川の等躬、仙台の画工加右衛門、尾花沢の清風、大石田の俳人たち、羽黒山の図司佐吉、鶴岡の長山重行、酒田の不玉、金沢の何處と北枝、福井の等裁など、各地の人々である。芭蕉はこの人々にあたたかく迎えられ、旅の疲れをいたわってもらっているのである。そして、時にはこの人々と連句をよんでいる。各地でもうけられた俳席の中で、『おくのほそ道』の本文に言及されているのは五ヶ所であるが、『曾良随行日記』によると、およそ三十に近い。

その俳席の中で、『おくのほそ道』の中でもっともくわしく述べられている大石田での俳席について見てみよう。

最上川もがみのらんと大石田おほいしたと云所いふところに日和ひよりを待まつ。爰ここに古き誹諧ひがいの種こぼれて、忘れぬ花はなのむかしをしたひ、昔角むかひ一声いっせいの心をやはらげ、此道このみちにさぐりあしして、新古しんこふた道みちにふみまよふといへども、みちしるべする人ひとしなければと、わりなき一卷いっせん残しぬ。このたびの風流ふうりゅう、爰ここに至いたり。

引用文でわかるように、「わりなき一卷」を残したと述べられているが、『曾良随行日記』で五月二十九日のこの大石田での芭蕉の様子をみると、「発・一巡終テ、翁兩人誘て黒瀧へ被参詣。予所勞故止。未尅被帰。道、俳有」と書かれている。大石田での俳席とその交流は、芭蕉が右のように述べているよりはるかに楽しく、和気あいあいだったことがうかがわれる。

次に、鶴岡から酒田にいたる部分を見てみよう。

羽黒はぐろを立て、鶴つるが岡の城下しろがた、長山氏重行ながやま しげゆきと云物いふもののふの家いへにむかへられて、誹諧ひがい一卷有。左吉さきちも共に送りぬ。

川舟に乗て、酒田の湊に下る。淵庵不玉と云医師の許を宿とす。

同じく『曾良随行日記』によると、六月十日、羽黒を立てて申の刻、今の午後四時ごろ鶴岡に着いた芭蕉は、一休みした後、夜は歌仙を巻いている。以後鶴岡での三日間、毎日俳席にのぞんでいる。それから六月十四日は、酒田で俳席にのぞんでいる。五月二十九日から六月二十一日まで、大石田・新庄・羽黒山・鶴岡・酒田の滞在にあたるこの二十三日間、十四日も俳席があった。まさに、「風流に遊ぶ」旅だったわけである。

しかし、このような地方の俳人たちとの活発な交流は、右の引用文でわかるように、『おくのほそ道』の本文にはほんの一行で述べられてしまったりしている。そのため、この「風流に遊ぶ」旅は、文章の合間に隠れてしまうわけである。俳諧、特に連句をよむ世界の人間関係について詳しく知っていたはずの当時の蕉門や俳人、日本の研究者には、この一行でも十分この「あそび」、その楽しさが伝わるであろう。まさに「風流に遊ぶ、呑気な、心安らかな」旅だとうなずくであろう。しかし、ここで「あそび」が読みとれるのには、俳諧についての知識が必要となってくる。その知識は、この紀行の中で、宗教的で悲哀に満ちている旅とはまた違う次元の、「風流に遊ぶ、呑気な、心安らかな」旅の世界を読みとる基盤になるのである。

この紀行文の中でもっとも切ない糸と思われる曾良との別れの場面を見てみよう。

曾良は腹を病て、伊勢の国、長島と云所にゆかりあれば、先立て行に、

行くてたふれ伏とも萩の原

曾良

と書置たり。行もの、悲しみ、残もの、うらみ、隻鳧のわかれて雪にまよふがごとし。予も又、

今日よりや書付消さん笠の露

八月五日、病気のため伊勢の方に先立つていく曾良との別れの場面である。今まで紀行文の中で主人公芭蕉の影のように見え隠れしていた同行の曾良のこの俳句は、ちなみに韓国の読者には『おくのほそ道』の俳句の中でもっとも人気のある一句でもある。「師と別れて旅を続け、道中行倒れたとしても、それが萩咲く野でありたいと思います」⁽¹⁾という曾良の思いは、悲壮で美しい。これに答えて、芭蕉は「今日よりや」をよんでいるが、この句の意味は、「旅の出発にあたって笠の裏に、『乾坤無住同行二人』と書き付けたが、今日から一人で旅をしなければならぬ。淋しい一人になるが、笠に置く露で、『同行二人』の文字を消さなければなるまい。」⁽²⁾と解せるであろう。この別れに際しての悲しみは、江戸を旅立つにあたっての門人たちとの別れより、はるかに芭蕉の身にしみているように読める。そしてますます孤独に包まれていく芭蕉の姿が見えてくる。

この翌日、芭蕉は全昌寺で泊まりながら前の晩そこに泊まった曾良が残した句を前にして、「一夜の隔、千里に同じ」と切なく曾良を思いやる。また、夜はあまり熟睡もできなかったようなそぶりでも、翌日の朝早くいかにもあわただしく慌てているようにしながら全昌寺を立つていく。それから汐越の松をみて、松岡の天竜寺を訪ねているが、ここまで来て、実は金沢の俳人北枝が金沢から同行してきていることをいいながら、「所々風景過さず思ひつゞけて、折節あはれなる作意など聞ゆ」という。北枝について述べている芭蕉のこの一言は、曾良と別れた後、北枝と歩いてきたこれまでの旅の様子的一段をうかがわせる。芭蕉のポーズからすると、曾良と別れてから以後、異郷のもとで天涯孤独の身のように見えたが、実はそ

うではなかつたのである。

では、曾良と別れる際のあの激し過ぎるようみえる二人の悲しみのポーズは、どう解すればよいであろうか。上野洋三氏は、曾良は、「死を覚悟しつつも、なお生ま身の人間として、生きているかぎり可能なユーモアを見出して行くこと」であつて、「死を正面に据えて、それを含み超えた笑いを目ざ」しているという。だから、彼の残した書置きは、「……伏ストモヨイ、一向ニカマワヌ、身ニトツテ後悔ハナイ」の意味に解釈すべきであつて、曾良の書置きに答えて芭蕉がよんだ「今日よりや」の句の意味は次のようになるという。

あなたが、死を正面に据えていることに、わたくしも正面から向き合ひましょう。その現実的な処置の一端として、「今日」この場から、あなたにかかわる「書付」を、わたくしは、みずからのこの手で抹消しましょう。どうぞ、後顧の憂なく邁進してください。⁶

春の日、江戸を旅立つて四ヵ月以上も一緒に歩いてきたこの「同行二人」が別れる時、すでに季節は秋をむかえていた。この秋の季節、旅の「同行」としての役目を果たせず師との別れを前にした曾良の「萩の原」の書置きに、芭蕉は「露」という同じ秋の自然をもつて答える。ここにおいてのこの二人の姿からは、一見死を覚悟したような悲しくてつらい別れの向こうに、俗世を逃れて自由を謳歌する「ユーモア」のある真の風流人の姿が浮かんでくる。この後、芭蕉はここまでにはなかつた「呑気な、心安らかな旅」をひろげていくが、この切ない悲しみの場面と相反するその様子は、このような「ユーモア」の上であればこそ理解できよう。

曾良と別れてから十日ほど経つた八月十四日、夕方になつて敦賀の港に着いて宿をとつた芭蕉は、宿の主にすすめられて酒を飲んで、氣比神社に夜参している。この紀行文で酒が出てくるのは、ここがはじめである。それから、八月十六日は、種の浜に船を走らせているが、それを見てみよう。

十六日、空霽たれば、ますほの小貝ひろはんと、種の濱に舟を走す。海上七里あり。天屋何某と云もの、破籠・小竹筒など、こまやかにした、めさせ、僕あまた舟にとりのせて、追風時のまに吹着ぬ。濱はわづかなる海士の小家にて、侘しき法花寺あり。爰に茶を飲、酒をあたゝめて、夕ぐれのさびしさ感に堪たり。

寂しさや須磨にかちたる濱の秋

浪の間や小貝にまじる萩の塵

其日のあらまし、等裁に筆をとらせて寺に残す。

福井の俳人等裁が同行している種の浜で、「茶を飲、酒をあたゝめ」ながら過ごしているこの一時は、この紀行文の中でもっとものんびりとした場面であろう。これから五日後の八月二十一日、芭蕉はこの旅の終わりの地である大垣についているが、種の浜での舟遊びに見られるこの様子から一転して、「駒にたすけられて大垣の庄に入」ったと、いかにも疲れ果てたように述べている。これは、旅の第一日目の夜、千住からわずか三里にもならない草加に「たどり着」いたと述べていたことと通じ合うものであろう。これらの表現の奥から、前述した曾良とのやりとりに見られる「ユーモア」を感じずにはいられない。

これまで見てきたように、『おくのほそ道』の世界は、一見悲哀なる求道的な旅のように見えるが、「風流に遊ぶ、呑気な、心安らかな」旅の要素が、巧妙に入れあつた形で進行していく。桜井武次郎氏は、「俳諧で習熟した趣向と表の趣向を見事に使つて文章に二重構造を施しているところに、『おくのほそ道』解釈上の奥深さがある」と指摘しているが、まさにその通りであろう。『おくのほそ道』を読むにあつて、「俳諧」がわかっているかいないかは、大きな境目になる。「俳諧を習熟」した読者には、この作品の「表の趣向」、つまり悲哀で孤独な旅の世界だけでなく、「俳諧で習熟した趣向」、いわば「風流に遊ぶ、呑気な、心安らかな」旅までがよみとれるであろう。俳諧を「習熟」していないばかりか、俳諧を作り出した文化のかなたにある韓国の読者に、この作品の「表の趣向」の悲哀なる世界しか読取れないのは、ある意味では当たり前かも知らない。

韓国におけるこの作品の読みというのは、ひとことでいえば、宗教的で悲哀的な旅人、すなわち「表の趣向」の読みと通いあう。世俗生活はつねに新しい文化の創造に向かつて発展することを理想とするが、宗教生活はつねに存在の起源に向かつて遡つていこうとする回帰性があるという。歌枕、先行詩人たちの跡、由緒深い寺社、古戦地をたずねて歩く芭蕉の姿からは、このような「回帰性」のようなものがうかがわれる。それに、ところどころでは芭蕉自らの宗教的なポーズが加えられている。そのため、宗教的な旨のことばなど、ほとんど語っていないにしても、この作品の世界は宗教的な雰囲気に含まれているかのように感じられてしまうのではなからうか。現に、芭蕉を修行僧と思ひ込んでしまつて多くの韓国の読者がそのあかしである。

一九八〇年、佐藤和夫氏は、外国における芭蕉受容のひとつの特徴として、「芭蕉の詩とライフ・スタイルは東洋人には迎えられず、もっぱら西欧人によって語られている」^⑧ことを指摘していた。この指摘は、中国の場合は詳しくは知らないが、韓国の場合は芭蕉だけでなく俳句についても、指摘の通りであった。また、その状態は、この国ではほぼ一〇年以上続いていたといえよう。

それから二〇年経った今、芭蕉は韓国の研究者に、韓国の代表的な現代詩人に、そして一般読者に、それぞれに受け入れられている。一九九八年、『おくのほそ道』の韓国語訳^⑨が出版されたほかに、芭蕉や蕪村の俳句集の翻訳^⑩も出ている。それに、注目すべきなのは、韓国の現代詩人によって、俳句翻訳集^⑪が出て、それが一般読者にかんがりの反響を起こしたということである。芭蕉についてはかなり調べたはずのこの現代詩人は、その「後書き」に芭蕉が出家した僧だと書くあやまちをおかしていた。

このような状況の中で目立つのは、芭蕉がもっぱら悲哀に満ちた旅人と受け入れられていることである。また、彼の俳句は、この世を超越した何かを求めているもののように受け止められている。これは、韓国においての芭蕉が、日本から直接というよりは西欧で紹介されているのを通して間接的に受け入れられたこと、特に禅の哲学や、アメリカのエズラ・パウンドへの影響などの知識によって理解されていたこととも関係があるであろう。

「あてどもない道をどこまでも歩いていく孤独な旅人」。これは日本における「俳句の習熟」とは距離のある多くの一般の人々の芭蕉像の一つであろう。そういう人々は、実際の芭蕉の旅がそれほどまでに孤独な旅ではなかったし、所々で俳席にのぞみ、各地の俳人たちとも交流していたといわれると、がっかりしたり、時には「孤独なる芭蕉像」に反感を示す場合もあるようである。今のところ、韓国における芭蕉像は、これとほとんど変わらないような気がする。特に、韓国の場合は、これに宗教の色が加わっている

ことが指摘できよう。

これからの韓国における芭蕉の研究および紹介は、俳諧文芸が本来に持つユーモアやウィットなどの滑稽性について、より力を入れるべきであろう。涙や悲しみと違って芭蕉の笑い、俳諧の笑いが伝わるのは難しいかも知れないが、悲哀に満ちた修行僧的な『おくのほそ道』の世界を超えて、「風流に遊ぶ、呑気な、心安らかな」旅の世界が見えた時こそ、この作品の本当の理解に近づいていくだろうと思うからである。また、俳諧という文芸ジャンルの持つ「あそび」の要素についての理解こそ、日本文化の真の理解につながるものであると思うからである。『おくのほそ道』は、俳諧の、そして日本の「あそび」、「笑い」と「ユーモア」の一面をうかがえるのに、よい材料の一つであろう。そういう意味でもこの作品は、普遍的で多様な回路をもつ文学世界を明示していると言えよう。

井本農一「おくのほそ道論」(芭蕉の本6 『漂白の魂』角川書店 一九七〇)

本稿における『おくのほそ道』および芭蕉の俳句・俳文、曾良の『曾良随行日記』の本文引用は、『校本芭蕉全集』(富士見書房)による。

『曾良随行日記』によると、この旅の第一日目の夜は粕壁に泊まっていることがわかる。芭蕉が草加に泊まったと書いていることについては、単なる芭蕉の記憶違い説、芭蕉の意識的な虚構説などいろいろあるが、ここではまづ紀行文の本文に基づいて論旨を進めていくことにする。

萩原恭男『芭蕉 おくのほそ道』岩波文庫 一九七九

新編日本文学全集『松尾芭蕉集②』小学館 一九九五

- 6 上野洋三『芭蕉論』筑摩書房 一九八六
- 7 桜井武次郎「『曾良日記』で『おくのほそ道』の虚構はどこまで明らかになるか」(『国文学』一九九三、一一)
- 8 佐藤和夫「外国人の見た芭蕉」(別冊国文学『芭蕉必携』一九七九)
- 9 拙訳『芭蕉の俳句紀行』おくのほそ道』バダ出版社・ソウル、一九九八
- 10 柳・オクヒ訳『松尾芭蕉の俳句』民音社・ソウル、一九九八
- 崔・チュンヒ訳『俳句 一七文字の詩』パギジョン・ソウル、二〇〇〇
- 11 柳・シファ訳『一行も長すぎる』イレ・ソウル、二〇〇〇